

## 十 一 十

厚い雲が空を覆っている。

もたらされた繁栄はんえいに人々は酔いしれ、踊る。

蒸気機関の発達により、日中でも太陽の光が届きにくい。

しかし、人々は電気の明りにより不自由なく、むしろそれどころか夜の世界までも食らい尽くしていかうとしていた。

発展は留まる事知らず、またそれによる人口の増加は潤沢じゆんたくな資金を上流階級にもたらした一方、下層階級に落とされる暗闇は深度を増していた。

一八八八年、イギリス首都、ロンドン。

テムズ川に横断されるようにして栄えたこの街は、芸術を愛し、霧の都と呼ばれている。

上流階級の華やかな生活が目立つ中、市内の治安は悪くなる一方だった。

まるで趣味の悪いオウムののように、全身をさまざま模様で着飾った婦人が、仕立てた馬車で優雅に往来を行き来する。その隣の裏路地では、おおよそ考えつく限りの悲惨な生活を送る者が大半であった。

七十歳を越えるであろう皺しわ枯れた老婆がドブをさらひ、ガラクタを拾い上げては狂ったかのような笑いを上げる。

スーツを着こなし、髭を蓄えた紳士は、ぶつかつた薄汚い少年に怪訝けげんな目を向ける。

薄汚い少年の手には、不釣り合いな大きな財布。その重みにほくそえんだ少年の目は暗い光を湛たえたままだ。

体格のいい男はほどよく褐色に焼けた肌をさらし、小さな少女に話し掛ける。

少女はその身体に似合わないスカートをたくし上げ、言葉を返す。頷きあうと、その二人は木賃宿きちんやどの中に消えた。

ずた袋かと思つたそれはよく見れば人であり、売る気もない商品を並べている。どれもこれも拾つてきたようなガラクタで埋め尽くされ、時折りそこに向かつて金が投げられるが、誰も商品を取ろうとしない。

これが最下層と呼ばれる低所得者層の暮らしである。

通りには所狭しと露店が並び、声を囁ささらして呼び込みをする姿が絶えない。

行き交う雑多な人々は多く、真まっ直すぐに歩くのは到底無理だろう。

一見すれば活気溢れる町並みを、しかしよく見渡してみれば、そこかしこに暗い目をした者が歩いてゐる。

その子供も、そんな一人であつた。

くすんだ灰色の髪の毛は好き放題に伸び、元の色である銀はどこにも見えず、さらに茶色の帽子を被っているのだから余計に目立たない。

青色の瞳は淀み、死んだ魚を思わせた。

陶磁器のように白い肌は薄汚れ、何日も風呂にすら入っていないことをうかがわせる。

着ている服も灰色であり、元は白いシャツだったのか、それともただのポロ布なのかすらも判然とせず、茶色のズボンも黒ずんでいて、すでに黒い面積の方が多かった。

その子供は人ごみを慣れた足取りで進む。

前だけを見つめて歩きながら、傍らの露店に手を伸ばすと、その商品である油で揚げたパンを掴んだ。

そのまま、金も払わず歩き続ける。

「おいボウズ！ 勘定かんじょうしてからだ！」

「……………」

それを見た店主の野太い声が掛けられるが、子供は一向に気にした風もなく歩き去っていく。  
「ちっ、ちよつと頼まあ」

店主は傍らの妻である女性に声を掛けると、屋台を抜け出し、子供を追う。

「おい！ ボウズ！」

「……………」

子供を追いかけながら再び声を掛けると、その子供は振り返る事無く走り出した。

「あ！ おい待ってクソガキ！！ おーい泥棒だ！ 誰かそのガキをとっ捕まえてくれ！！」

人ごみを掻き分け、店主が後を追う。

子供特有のすばしっこさで人ごみを駆け抜ける相手に店主はついに業を煮やし、怒声を張り上げた。

「コラア！ クソガキい！」

その声に行き交う人々が彼の回りを離れ、それでいて誰も気に止めずに歩き去る。

もちろん、先を行く子供を捕まえようとする人間もない。

なぜなら、これがこの日常でもあるからだ。

人ごみをすり抜け、走り去ろうとする子供を怒声を上げながら追い続ける店主。そのあまりの剣幕に人々は自然と道を譲る形になっていく。

結果、少しずつではあるが両者の差は徐々に縮まっていった。

「……………」

チラリと振り返った子供は、徐々に詰まる距離を確認すると手近な角を折れる。もちろんその際に近場を歩いていた人間を引き寄せ、簡易バリケードにすることを忘れない。

「どけえ！」

体格にモノを言わせてバリケードにされた人間を弾き飛ばすと、後を追うように路地裏に走

り込む。

狭く、入り組んだ裏路地を迷う事無く逃げ続ける子供は、しかし己の失策を思い知る。何度か折れ曲がったそこは、袋小路になっていた。

「……………」

しばし考え込む子供の背にはやや息を切らした店主が立っていた。

「もう逃がさねえぞ……」

店主がジリジリと近づいてくる。

「っ！」

意を決して銀髪をひるがえしながら振り向いた子供の手には、鋭利な刃物が握られていた。それを見て店主の顔がひきつる。

「オイ……ガキがそんな物騒なモンを持ってちやいけねえな……」

店主は油断無く子供を見据<sup>みす</sup>える。その眼光には鋭い輝きが含まれていた。

スツと腰を落とすと、意外なほどに隙なく構える。

「オレはこう見えても海兵隊上がりでな……怪我<sup>けが</sup>しねえウチにやめときな？」

「……………」

それを見た子供は、わずかな逡巡<sup>しゆんじゆん</sup>を瞳に浮かべる。

それを見逃すほど、店主の勘<sup>かん</sup>は鈍<sup>鈍</sup>っていないかった。

気合一閃。力強く石畳を踏みしめ、子供に飛び掛かる。狙いはナイフを持った右手の手首。掴んでしまえば刺される事も無く、力の差でナイフを取り落とさせる事も可能だからだ。

「っ！」

子供は一瞬だけ目を見開くと、素早く行動に移った。

手にしたナイフを店主の顔をめがけて勢いよく投げつける。

「っちい！」

狙い違わずに飛来する銀光に、身体を大きく開いて回避行動を取る。

辛うじて避けられたが、視線を戻したそこに子供の姿はない。

「どこ行きやがった……？」

慌てて周囲をぐるりと見渡してみるが、すでに影も形もなかった。

袋小路の壁は子供がよじ登れそうな踏み台はなく、かといって身を隠せるような物もない。

まさに忽然と姿を消したとしか思えない。

後ろを振り返ってみても、姿どころか、先程投げられたはずのナイフも姿を消していた。

「……逃がしたか。今度見かけたらとっ捕まえてやる……」

店主は舌打ちをすると来た道を戻り始めた。いつまでも店を任せておくわけにもいかないのだ。パン一つにこだわって三つ売る機会を逃がしては明日の生活にも関わる。

一方、子供はというと一本隣のやはり路地裏を歩いていた。手にした揚げパンを食べている。

いつまでも持つているのは危険であると判断したのだろう。

食べる手つきや噛む速度は速くても、その表情は動かない。昨日から何も食べていないにも関わらず、だ。

最後の一欠片を口に放り込み、ごくんと飲み込む。足元で黒猫がにやあと鳴く。

おそらくまともな食事すら取れていないのであろう痩せこけた身体は、同年代の子供と比べても貧弱であった。野良猫にパンをくれるほど裕福でもないのだ。

薄汚れた顔には意志の強そうな眉と、やはり光を映さない蒼い目。細く尖った鼻に、子供らしいあどけなさを残した口は大きく開かれる事はない。顎も細いせいかな全体的にシャープな印象を与える。

そしてこれほど近づいてようやく解かるのは、その子供が少女であるという事だ。

ぱっと見では少年にしか見えないような服装をし、他の多くの浮浪少年達のように盗みでその日を何とか生き抜く少女。

少し、この街では珍しいかもしれない。歳若いとはいえ、女性は女性である。同年代の少女たちで、街角で客をとる姿は別段に珍しい事でもなかった。

その日を生きる為ならなんでも使うのがスラムの住人である以上、それをしないのも少々首を傾げたくなる話である。

とはいえ、少女はその能力を有効に利用して街の片隅に生きているので、問題は無かった。

先ほどパンを盗んだ通りとは違う通りに出て、歩く。  
その少女を見つめる目があった事を、彼女はまだ知らない。